元禄歳時記(上)

杉本苑子

講談社

元禄歳時記（上）
第一刷発行　昭和四十九年十二月十二日
著　者　杉本苑子
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二　振替　東京　三九三〇
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
©杉本苑子　昭和49年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。（文二）

第一話　さんご珠は血の色

幽　霊　星……7
夜道の蝶……15
泣きぼくろ……22
ギヤマン天井……30
江戸名所百景……38
花いくさ……46
つきまとう影……54
京みやげ……64
正体見たり……70
残り香……77

第二話　回れ回れ風ぐるま

春寒む……87
雛の宵……95
猫を呼ぶ声……103
昼のほたる……110
貝づくし……118
巨船解体……126
魔火……134
お七と小よし……142
黙れ門番……149
殿中刃傷……157

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三話　あぐり夫人の笑い

鶴の舞う野……168
花嫁月夜……176
刺客……184
胡桃がゆ……192
潜入……200
黄石公……207
乱刃……215
兄と弟……222
走り茄子……230
美しい餌食……238

装幀　川田　幹

元禄歳時記

（上）

第一話　さんご珠は血の色

幽　霊　星

新井勘解由の日課は、洗顔、結髪のあと、竹ぼうきをにぎって報恩寺境内を、すみずみまでたんねんに、掃き清めることからまず、はじまる。

やたら、樹木が多い上に、からっ風の季節にさしかかって、落葉は毎朝、あきれるほど降りつもった。

勘解由はでも、いやな顔ひとつしない。報恩寺には恩がある。庫裏の離れを、無償で貸してもらっているのである。

亡くなった先代の住職が、隠居所にするつもりで造らせたものだけに、間数こそ六畳、三畳の二間きりだが、南がわを広縁がかこみ、水屋と土間をゆったり取って、一人住まいにはもったいない小ぎれいな一軒建てだった。

掃きよせた落葉は燃料に使った。

いきおいよく燃えあがるかわりに灰になるのも早く、七輪につききってくべつづけなければならないけれど、やかんの湯をわかし、鍋に煮てある卯の花を温めなおすぐらいは、じゅうぶん事たりた。

米はなかなか買えない。とぼしい収入のほとんどが、書籍代に消えてしまうから、食事は主食と菜を兼ねて、豆腐のしぼりカスときまっている。

そのかわり茶の葉は、できるだけよい品を求めた。せめてもの、ささやかなぜいたくだ。濃いめにいれた朝の一服が、一日の思考の冴えを約束してくれる爽快さを思うと、茶への出費は欠かせない。

つましいくらしは苦にはならないが、貧に鈍って卑しくなるのだけは避けたいと、日ごろ勘解由は自戒している。つぎが当たり、洗いざらしてはいても、だから彼の衣服はいつも清潔だし、態度や言葉つきには、ややもすると戦闘的ともいっていい気負いが匂った。

年は二十四――。まだ、若い。

その若さが、気性のはげしさと学問への自信に裏づけられて、ときに孤高の気をおびるのを、近所かいわいの町民どもの目は、

「へッ、高慢ちきなやろうじゃねえか」
とも、見るらしい。
面と向かえば、敬して遠ざける神妙さで、あいさつぐらい交わすものの、かげでは、
「オカラ先生」
こっそり、あざ笑って呼ぶ者が少なくない。
そんな中で、報恩寺の裏門前に住む丹七だけは例外だ。腕っこきの細工職人だが、ひまさえあれば勘解由の住む隠居所へ遊びにきて、たあいない世間話に興じてゆく。
今朝も、境内の清掃を終わった勘解由が、土塀の外に回って往来のごみを掃きはじめたところへ、丹七は通りかかって、
「お精が出ますね先生」
声をかけてきた。
「や、もどられたか」
と旅焼けした相手の笑顔へ、勘解由も思わず微笑をほころばせた。得意先の、さる豪商にたのまれて、はるばる長崎まで用たしに出かけたとかで、ここ二ヵ月ほど、家を留守にしていた丹七なのである。
「へえ、ゆうべおそく帰ってきましたよ」
「たのまれ物とやらは？」
「おかげで手に入りましてね。さっそくこれから、お納めしにゆくところなんですが、どえらい品ですぜ先生。目の法楽に、こっそりお見せしましょうか」
ゆだんなく、あたりへ視線をくばりながら、かかえこんでいた布包みの結び目を、丹七は手ばやくほどきかけた。
「待て。待ってくれ丹さん」
勘解由はあわてて、結び目ごと丹七の手を、布包みの上からおさえた。
「やたら、人に見せてはいけない品物なのではないかね？」
「そうなんです。長崎くんだりまで出かけて、こいつを買い求めてきたことはもちろん、あっしがどう、細工するかも、今のところは秘密にしておけって、かたく先さまから口どめされているんですよ」
「そういう物を、ことわりなしに見てはいけない。やめにするよ」
「りちぎだなあ」
丹七は肩をすくめた。
「おもて向きはそういうことだけど、なあに、かまやしませんさ。ほかならねえ先生のこった。へるもんじゃなし。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まあ、ちっとごらんなせえましょ」
大まかな職人気質ばかりではなく、苦心の末、入手してきたその品を見せびらかし、誇りたくてたまらない顔だ。人なみに、勘解由の中にも好奇心がうずいた。
「では、見せてもらおうか」
「目ン玉、でんぐり返さねえでくだせえよ」
いま一度、往来の左右へ視線を走らせたあげく、丹七がとり出したのは、根まわりの差しわたし七、八寸はありそうな、みごとなさんご樹の幹である。
「こりゃあ、すごい」
「色がいいでしょう?」
「したたるばかりな深紅だなあ」
「さんごには、べに、赤、桃いろ、ぼけ、白など、幾種か色がありますが、これほど紅の濃いのは珍しい。あっしもながいこと、玉や石、さんごの細工を扱ってきたけど、こんなのに出くわしたのははじめてですよ」
美しいことは、たしかに美しい。
しかし土塀のくちなし、わくら葉の茶、やわらかな朝の日ざしのいぶし銀など、初冬の枯れ色のなかに置くと、その紅の深さは鮮烈すぎて、いかにも落ちつきがわるかった。
「さぞ、高価なものなのだろうね」
「そりゃあ先生。へへへへ」
貧書生のふところとは、無縁な値段だといわんばかりな笑い方で、丹七はさんごを包みなおし、
「じゃ、先方へとどけてきます。ごめんなすって……」
そそくさ、去りかけた。
「気をつけてゆくんだぞ」
ふっと、名状しがたい不安にゆすぶられたのは、濡れ濡れ光る紅いろに、血の不吉を連想したからかもしれない。
江戸の町なか。しかも、まっ昼間……。
ばかげた懸念だとは思いながらも、
「金目の品を持ち歩くのだ。ひったくりになど、あわないようにな」
念押しする勘解由へ、
「だいじょうぶですよう」
手をふって、みるみる丹七は遠ざかった。
そのうしろ姿が、土塀の曲り角に消えるまで見送って、勘解由がふたたび竹ぼうきをとりかけたとき、
「お師匠さまア」

と、こんどは背後から、カンだかい子供の声でよびかけられた。吐く息を、白く凍らせながら、鉄砲玉さながらとんでくる小さな影は、手習い子の河村新五だ。
「ああよかった。まにあったア」
かかえて走ってきた両手ごと、ニュウと突き出したのは、何がはいっているのかこれもまた、ばかげて大きな布包みであった。
「そうぞうしいぞ、こらッ」
新五を、勘解由はにらんだ。
「せっかく掃きよせた落葉を、蹴散らしたではないか、この足が……」
竹ぼうきで一つ、向こう脛をくらわしたぐらいで、だが、辟易する腕白ではない。
「あ痛ア」
とびあがるまも、
「朝めしまだでしょ。はやく掃除なんか切りあげちゃいなさいよお師匠さま。おれ、お茶の湯をわかしとこうか」
口はせかせか、動かしづめだ。
「お節介は無用にしろ。そんなひまがあるなら自分の机を出して、昨日習ったぶんの、おさらいでもするがいい」
「はーいッ」
勢いあまってつんのめりながら、山門めがけて駆け出すあとから、勘解由も苦笑しつつ塵取りをさげて、隠居所の勝手口へもどった。
いま一人の手習い子、お松がすでに出てきていた。報恩寺の執事の姪なので、庭づたいに裏からやってくる。
いちはやく、七輪に落葉をくべて、やかんの底をあおぎたてていた少女は、勘解由を見るなり、すっくり立ちあがって、
「先生ッ、おはようございます」
礼儀ただしく、朝のあいさつをする。
「やあ、おはよう」
新五は十三。お松は十一。
男の子のくせに、新五ががたがた気ぜわしく、熱中と飽きっぽさのくり返しの中で、いたずらだけは三人前……。のべつまくなしに叱られているのにくらべると、お松ははるかに行儀よかった。なによりも無口だし、気質も地味で、上調子なところがない。
呑みこみが早いかわりに尻へ抜けるのも早い新五の、そそっかしさとは正反対に、なっとくゆくまで問い直し、手

間はすこしかかるけれど、いったん覚えたら忘れない手がたさを、お松は学問にも発揮した。
どちらもじつは、勘解由は可愛くてたまらない。たった二人きりの豆門弟なのである。
「さて、食事にとりかかろうか」
手を洗い、労働用のたっつけ袴を常の袴にはきかえて、六畳の間に彼は端座する。
お松がやかんを運び、箱膳を運んでくる。よくわいた湯を急須にこなし、このみの分量の茶を入れて、ふくよかな香りをまずたのしみ、ひとくち、ふくんで、
「うまいッ」
ニコッと笑う勘解由を、子供たちもうれしそうにみつめる。
いつもはおれだ、わたしだと七輪のうばい合いにひと騒ぎ演じるのに、今朝の新五があっさり、湯わかし役をお松にゆずって、持参した例の大荷物をそばに引きつけ、鼻メドをいらがせているのは、胸にいちもつある証拠だが、あんのじょう、勘解由が箱膳をあけ、箸をとり出すととたんに、
「待ったア」
大声をあげてさえぎった。
「先生、今日も朝めしはオカラでしょ？」
「そうだよ。晩めしも同様、豆腐カスだ」
「やめてください。おれ、ごちそう持ってきたんだから……」
包みをほどいて取り出したのは、梨地蒔絵、五段がさねのりっぱな重箱である。
「父さんからのことづてもあるんだよ。今晩、うちへご招待したいんだってさ。縁談だぜ先生。すてきなお嫁さんを世話したいんだって……。美人で、しかも、二千両の持参金つきだよ。きてくれるね？　先生」
当の勘解由が、なにを言い出すより早く、つぶらな目を、お松がくるくるみはって、
「まあ、すごい。美人で二千両、持参金のつく花嫁さんなんて、どこにいるの？」
膝ごと、新五へ向きなおった。
「すぐ近くにいるよ。おれんちにいるんだ。おれの、二番目の兄さんの娘だから、ええっと、おれには……おれには……」
「姪にあたるわけじゃない？」

「そういう勘定だな」
「わあ、おかしい。チビの叔父さん。きっと姪御さんのほうが、年上なのね」
「だって仕方ないだろ。伝十郎兄貴とおれ、年がずいぶん離れているんだもの」
言うまにも、せわしなく手はうごいて、重箱をつぎつぎに並べたてる。
「おいしそうねえ」
お松の関心は、たちまちご馳走にそれた。
「これ、たまごの厚焼きでしょ？」
「そっちの黒いのは昆布巻さ。こいつは牛蒡とこんにゃくの煮しめ、こっちの丸いのは山鳥のツクネだぜ」
とり合わずに、勘解由は常食の卵の花を鉢から取り皿に分け、だまって口へはこびはじめた。ただし、山海の珍味を前にしては、さすがにあまり、おいしそうではない。
「あれ、お師匠さま、お重の中のもの食べないんですか？」
「いらない」
「どうしてさ。せっかくおれがお三輪さんにたのんで、ゆうべのうちから腕にヨリかけて、こしらえてもらったごちそうなのに……」
「お三輪さんとは、だれだ？」
「だからそれが、美人で二千両の嫁さんですよ」
「ふーん」
「世間のやつら、お師匠さまのこと何て仇名してるか、知ってますか？」
「知ってるさ。オカラ先生だろう？」
「それだけじゃないぜ。朝鮮飴の吸いがらしってんだ」
「なんだそれは……。なんのことだ」
「たぶん、歯にも顎にも始末におえないカンカチ野郎ってことだろ」
「なんと悪口されようと、いわれなく衣食の恵みを受けることはできない。河村新五からは、月々、学問教授の謝礼をうけ取っている。それ以上、不相応なほどこしをもらえば、わたしは師の皮をかぶった乞食になる」
「じゃ、いいさ」
あやうく、ベソをかきそうになるのを新五はこらえて、ごそごそ懐中をさぐり、
「今夜の招待だけでも、受けてくれますね」
父の河村十右衛門から託された招きの状をとり出した。

明暦の大火直後、尾州桧の思惑買いから巨利をつかんで、材木商をふり出しに土木工事、海運業など、手びろくいくつもの事業をいとなむ江戸でも屈指の資産家だ。

そんな大金持ちのせがれが、たとえ冷やめし食いの五男坊であれ、新井勘解由の私塾のような、貧寒とした寺小屋へかよってくるのは、一見、奇異な感じだが、どうやら新五は、

『童蒙指南　新井白石学林』

と、報恩寺の山門に打ちつけた木の香あたらしい看板を見て、親にも兄にも相談せず、気まぐれに入学してしまったらしい。後日、あらためて父の河村十右衛門が束脩を持参し、

「腕白息子、どうかびしびしおしかりを……」

あいさつにきたけれども、そのときの印象ではごく、気さくな、財力をひけらかす気配などすこしもない腰のひくい中老人だったのである。

「なんだ。招きの状を、ことづかってきていたのか新五」

「うん」

「そういうものがあったなら、重箱のご馳走など並べ散らす前に、さっさと見せなければいけないじゃないか」

こごとを言い言い、食後の茶で口中を清めて、勘解由は河村十右衛門からの手紙を、黙読しはじめた。

日ごろ、やんちゃ坊主の新五めが、ひとかたならぬご教導にあずかり、おかげで学力もめきめき、つき出しているのは、父親としてよろこばしいかぎりである。ついては、おひき合わせしたい学者、文人がたも二、三これあり、今夕、拙宅にて粗餐をさしあげたい。お願いついでに、このさい、雅号もお選びいただきたく、ご光来を心からお待ち申しあげている――といった意味の文章が、むだのない、したしみぶかい筆致でつづられていた。

「せっかくのご厚意だ。うかがうと、父上に申しあげてくれ」

書状をたたみながら勘解由は言った。

縁談の件など一言半句も、十右衛門は書いてきていないが、

「ほーら、みろみろ。コンコチ先生も、美人のお三輪さんと二千両の持参金には、ふらふらッときたらしいぞ」

「だから行く気になったのね。いやーだ」

目くばせ、目まぜで、新五とお松はうなずき合い、おたがいの膝をつつき交わして、クスクス笑いをかみころし

た。

箱膳が片づくと、六畳間には手習い机が二つ持ち出され、授業がはじまる。二人とも、とっくに村づくし国づくし、実語教、童子訓などは卒業して、いま小学の段階である。

ひとくぎりずつ、勘解由が読みすすむ尾について、子供たちの、せいいっぱいな高調子が、日だまりの障子に、うららかにはね返る。

やがて退屈しだして、いたずらをはじめるのはきまって新五だ。ふところから銭亀をとり出し、こっそりお松の首すじに這わせて、

「きゃあ——」

悲鳴をあげさせるかと思うと、

「こらッ、机のかどを、なぜ削るッ」

「小刀の切れ味が、試したかったんだもの」

寸刻も、目がはなせない。

そのたびに、慈悲棒と名づける竹鞭がひらめき、新五の肩や手首に体罰が炸裂するが、効果はさほどあがっていない。

正午で授業はうち切られ、子供たちはいったん、自宅へ帰る。そして午後、お松はお針の稽古、新五は撃剣の道場へ行き、八ッすぎにまた『白石学林』へあつまって、こんどはみっちり、勘解由から習字をならうのである。

終わると夕方——。みじかい冬の日は、うす墨いろに暮れかける。

やっと解放された少年少女は、縁先へとび出してくちぐちにさけぶ。

「今夜もまた、出たぞ、幽霊星が……」

「お化け星、お化け星、こわいなあ」

ことし——延宝八年の秋の終わりごろから、西南の空に夜ごと現れはじめた巨大な彗星である。数十丈におよぶ光芒を、ながながと裾に曳くホウキ星だが、江戸の町民はおとなも子供も、幽霊星とよんで気味わるがった。

それを見あげていたおりもおりだから、

「こんばんは。新井先生、おられますか?」

いきなり、暮色をわけて近づいてきた女の声、青白くひきつったその顔に、

「だ、だれだい、あんた……」

子供らはおどろいて、すくみあがった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com